

心地よく、冷たくて・ツナガレシモノ

藤田ヒロシ

○キャスト

マヒル……………

女・21 (10) 母親と死別。社会の吹き溜まりで生きてきた。ある日の夜にチヨの部屋の前で倒れる。

チヨ……………

女・24 自分の暮らす部屋の前で倒れていたマヒルを放つてはおけず、一緒に暮らし始める。

ママ……………

女・37 マヒルの母親。病に倒れ、マヒルを一人残す。

ミノル……………

男・40 社会の吹き溜まりで生きている男。白痴。

ミヨ……………

女・24 社会の吹き溜まりで生きている女。売女。

センセ……………

男・50 社会の吹き溜まりで生きている男。偽善者。
(クチキ)

○スタッフ

演出……………藤田ヒロシ

音響……………白柳友紀

照明……………日浦カズトシ

制作……………れい子

○公演情報

日にち……………2016年7月2日・3日

時間……………2日・19時／3日・13時 17時

会場……………木下恵介記念館

季節は夏。うす暗く古い部屋。(下手側に) テーブル一つにイスが二つ。それらは全く異なるデザインで、寄せ集めと一目でわかる。(上手側に) パイプベッド。

闇の中に響くチヨの声。

声 (チヨ)

ひどく寝苦しい夜。それは特別な事じゃない。どうせ眠れないからベッドには入らない。かといって何かをするわけでもない。けれどあの日はいつものそれと少し違っていた。「ドン」ドアに何かがぶつかった鈍い音がした。覗き窓からは何も見えなかった。ノブに手をかけ、呼吸を一つ。私はドアを押した。

あたりが明るくなる。

人が倒れていた。女。躰は間違いないそうだったが、髪も服も何もかも、その姿は色という色を失い弱弱しく、小さな子供のようにも見えた。ひどく寝苦しい夜、そこに吹く非力な風にさえも飛ばされてしまいそうだった。

○「チヨ」の部屋 (出逢いから一夜)

ベッドの上で眠っているマヒル。椅子に座って食パンを食べているチヨ。

マヒル (寝言。小さな声で) ママ、ママ、ママ。

チヨ (無反応で食べ続ける)

マヒル (ハッキリとした声で) ママ!

と、勢いよく目を覚ます。

マヒル ママ!?

チヨを見つけ、怯えて身を固める。

チヨ (驚く事もなく) おはよう。って言っても、今は夜だけだね。

マヒル (身を固くしたまま)

チヨ ココは私の部屋。それは私のベッド。で、私はチヨ。アンタは?

マヒル (身を固くしたまま)

チヨ なまえは?

マヒル (身を固くしたまま)

チヨ それはないんじゃない？私のベッドを丸一日使っておいて、名前も言わないなんてさ。

慌ててベッドから起き上がろうとするが、足に力が入らず床に倒れる。

チヨ 急に動くから。

マヒル (倒れたことに驚き、じっとしている)

チヨ アンタ、ママを探してるの？

マヒル (ゆっくりと立ち上がる)

チヨ 違うの？

マヒル (小さく頭を下げる)

チヨ ねえ。

マヒル (出て行こうとする)

チヨ それはないんじゃない？私のベッドを丸一日使っておいて、頭下げて終わりなんてさ。

マヒル (応えない)

チヨ 名前、教えてよ。これからどう呼べばいい？

マヒル (驚きを見せる)

チヨ 行くところないんじゃない？ここに居れば？お腹空いてる？

マヒル (小さく) マヒル。(ハッキリと) アタシ、マヒル。

チヨ マヒル、食べる？

と、テーブル上の食パンを指さす。

マヒル (小さく頷く)

チヨ 何か飲み物、欲しいね。マヒル、リンゴジュース好き？

マヒル (頷く)

リンゴジュースを取りに奥に消えるチヨ。

揺れる灯り、響くノイズ音。

静かにマヒルを呼ぶ声がする。ママの声だ。

声（ママ） マヒル。マヒル。マヒル。

○マヒルの夢または回想（ある日のマヒルとママ）

マヒルがベッドに座って思い出の歌をハミングしながら、スケッチブックに鉛筆で絵を描いている。

ママが入って来る。手にはリンゴジュースの入ったコップ。

ママ マヒル。はい、リンゴジュース。

と、テーブルに置く。

反応することなく、スケッチブックを取り出し、絵を描き始めるマヒル。

ママ アンタは本当に絵を描くのが好きだね。でも、もう時間だよ。さ、鉛筆を置いて。

マヒル （手を止めない）

ママ お腹空いでるでしょ？

マヒル （手を止めない）

ママ もう時間だよ。さ、鉛筆を置いて。

マヒル （手を止めない）

ママ （同時に）食べなさい。

マヒル （同時に）いらぬ。

ママ （語気を強め）マヒル！

マヒル （間髪入れず）いらぬ！

と、絵に集中する。

ママ 嘘つくんじゃない。朝も昼も、少ししか食べてー。

マヒル （絵を描きながら、遮って）嘘じゃないもん。

ママ なら、こんな物は食べたくないって事？わがまま言わないの！こんな物でも食べればお腹が膨れる。そんな絵、いくら描いたって腹は

膨れないんだよ。

と、スケッチブックを取り上げようとする。

嫌、嫌！

マヒル
（語気を強め）マヒル！

マヒル
（語気を強め）ダメ！ママ、ダメ！！

ママ
（一層強く）いい加減にしなさい！

と、スケッチブックを奪い取る。

マヒル
ダメ！ママ、ダメ！！ダメ！！

ママ
いつまで、マヒル！アンタはいつまで子供みたいにしてー。

マヒル
（遮って）ダメ！ママ、ダメ！！ダメ！！ダメ！！ダメ！！ダメ！！
ダメエエエエエエエエエエ！！！！！！

と、大声を上げて泣き出す。

ママ
うるさいっ！うるさいっ！うるさいっ！

マヒル
（駄々をこねて泣き続ける）

ママ
静かにしなっ！マヒル！！

と、勢いよく右手を振り上げる。

マヒル
ひっ！

と、ピタリと泣き止む。

ママ
早く、食べなさいっ！

マヒル
ママ。

ママ
あれしかないんだよ。

マヒル
（小さな声で）見ないで。まだ、描けてない。見ないで、ママ。まだちゃんと描けないから、まだ見ちゃダメ！

ママ
（胸押さえる）

マヒル
ママ！

ママ
（胸の痛みをこらえ）早く、食べなさいっ！

マヒル 大丈夫？

ママ 食べなさいっ！

と、言い終わると苦しむ。

マヒル ママ、大丈夫？

ママ (大きく息を一つして) 大丈夫よ。

マヒル 本当？

ママ (マヒルに近づき、マヒルの頭に手を乗せる)

マヒル ママ、食べて。ママ、食べてよ。ママ、何も食べてない。

ママ ……マヒル。

マヒル ママ、食べて。

ママ (スケッチブックを返し) ママなら大丈夫。お仕事行って、向こうでご飯を食べるから。

マヒル ママ、食べてよ。お休み、できないの？

寝るときは毛布を掛けて寝るんだよ。風邪ひいたら、好きな絵を描けなくなるよ。それじゃー。

と、髪を撫でてマヒルに背を向ける。

マヒル (遮って) 飲んで。りんごジュース飲んで。栄養いっぱい。元気になる。ママ教えてくれた。だから飲んで。

ママ マヒル、ありがとね。こんな母親なのに心配してくれて。優しい子ね。

と、テーブルに向いリンゴジュースを手にする。しかし、飲むことなく、それを持ってマヒルの元へ戻ってくる

マヒル ママ……。

でもね、マヒル。これはマヒルの物。マヒルが元気に生きて行く為の物。ママは飲めないのよ。

と、コップを半ば強引にマヒルに渡す。

マヒル (首を振る)

ママ (首を振る)

一口だけ口をつけて、コップを差し出すマヒル。

ママ
(首を振る)

マヒル
(コップとママを交互に見つめた後、残りを飲み干す)

ママ
(マヒルの頭に手を乗せ) ありがと、マヒル。

と、コップを手にとって奥に消える。すぐさま戻って来て、

ママ
それじゃ、行ってくるね。

部屋を出て行くママ。

マヒル
(部屋の出口まで行って) 行ってらっしゃい。

照明が変わる。

○「チヨ」の部屋 (出逢いから一夜)

部屋に出口に立っているマヒル。そこにチヨがコップを二つ持って現れる。

チヨ
はい、リンゴジュース。

と、カップの一つをテーブルに置き、ベッドに座る。

マヒル
(コップを手にし、不思議そうに眺める)

チヨ
どうかした？リンゴジュースよ。

マヒル
(不思議そうに眺める)

チヨ
リンゴジュース。

マヒル
(首を振る)

チヨ
リンゴジュースだって。(と一口飲んで) 飲めばわかるよ。

マヒル
(つられるように、コップを口に運ぶ)

チヨ
どう？

マヒル
(イスに座って、黙ってゴクゴクと飲む)

チヨ
でしょ？(パンの袋を差し出し) そっちは単にお腹を満たすだけの

物だけどき。

手を伸ばすマヒル。一心不乱にパンを食べる。

チヨ
（上体を起こし、小さく笑って）そんなに慌てなくても、誰も取らないよ。

マヒル
（口いっぱい頬張り、それをジュースで流し込み、手を合わせ）「ちそうさま」をする）

チヨ
（よりはっきり身体を起こし）マヒル。アンタさ……。

マヒル
（チヨをじっと見る）

見つめ合う二人。

チヨ
……おかわり持ってくるね。

と、起き上りコップ二つを持って奥に消える。

ベッドに向かう。

揺れる灯り、響くノイズ音。

ママの声がする。

声（ママ）
マヒル。マヒル。マヒル。

○マヒルの夢または回想・翌早朝（かつてマヒルがママと暮らした部屋）

ベッドで寝ているマヒル。毛布が肌蹴ている。

ママが帰って来る。手には小さな紙袋。それをテーブルに置くと、パンの入った服の中をのぞき、それを持って奥に消える。

パンの袋を置いてすぐに戻ると、ベッドに進み、マヒルの寝顔をのぞき込み、

ママ
マヒル、ただいま。（クスリと笑い）寝相はやんちゃね。

と、毛布を直す。

ママ
目を閉じて、小さな寝息を立てて……あの時の同じね。アンタを初めてこの手に抱いた時。その重さ、その温もりはずっと消えることなく、この手に残っている。

と、ベッド脇にあるスケッチブックを手にし、そっと開く。

ママ
この風景がこの世の何処かに……私も信じていた。アンタが生まれ、同時に私も生まれ変わったのだと思っていた。アンタと二人。新しい風景、その中で始められると信じた。だけど……だけどね……ゴメンね、マヒル。ママ、ダメだった。ママは見せてあげられない。教えてあげらー。

と、胸を押さえ、慌ててスケッチブックを戻しベッドを離れる。

ママ
「助けてと声を出せばいい」なんて、耳を澄まさない人の言葉。いつだってこの手に残る「あの時」が私に、二人に、生きて行く力を与えてくれる。そう信じ、這いずり、声を出して来た。手を伸ばし、叫び続けた。私はどうなったって構わない。せめてこの子だけでも。マヒルは生きて行く為には、助けが必要。馬鹿な男に惚れた馬鹿な女。私はそれで構わない。だけど、この子は……違う。それでも生きて行く為には、助けが必要なのよ。

と、倒れるようにイスに座る。

ママ
カーテンを開き、窓の向こう。眩い街並み。そこに私はいない。初めから、ずっと。希望は捨てたわけじゃない。何処にもなかった。マヒル。アンタを産んだ事、後悔なんてしていない。だけど、いい人生なんてとても言えない。

と、上体をテーブルに預ける。

しばらくして、マヒルが勢いよく上体を起こし、目を覚ます。

マヒル
ママ。

ママ
（上体を起こし）起きたのね。ただいま。

マヒル
おかえりなさい。ママ。アタシ、もう起きたからベッド使って。休んで。

と、ベッドから出てママのそばへ

ママ
（マヒルの頭に手を乗せ）ありがとね。でも、大丈夫よ。

マヒル
本当？

ママ
もちろん。そうだ、マヒル。今日はマヒルにプレゼントがあるのよ。

マヒル
「プレゼント」？

ママ そうよ。

と、テーブル上の紙袋を手にする。

マヒル ママ、今日は誕生日じゃないよ。

ママ そうね。

マヒル クリスマスじゃないよ。

ママ そうね。

マヒル どうして？

ママ ママがマヒルにプレゼントしたいから。おかしい？

と、紙袋を差し出す。

マヒル おかしい。

ママ そうかな？

マヒル (頷き) こんなことなかった。

ママ そうね、確かに初めてかも知れないね。でもね、マヒルにプレゼントしたいのよ。受け取って、マヒル。

マヒル (頷き、ゆっくりと紙袋を受け取り) 開けてもいい？

ママ うん。

マヒルが紙袋の中身を取り出す。それは24色の色鉛筆。

マヒル あ！色鉛筆だ！！ママ！！

と、興奮する。

ママ 気に入ってくれたかな？

マヒル うん、うん、ありがとう、ママ！！

と、抱きつくが、すぐに離れて、

マヒル どうして？

ママ マヒル。この世界にはいっぱい風景が広がっていて、いっぱいの色がある。だから、その色鉛筆でマヒルの風景を、彩られた風景を描いて欲しいの。

マヒル いいの？

ママ
もちろん。それはもうマヒルの物よ。

マヒル
ありがとう、ママ！！

と、ベッドに座って色鉛筆を試し書きする。

マヒル
「桃色」「朱色」「黄色」これは……「空色」。お空の色！高い高いお空の色。ママ！

ママ
なあに？

マヒル
（じっと見つめ）ママ。

ママ
ん？

マヒル
アタシ、描く。このいっぱいの色で、いっぱいの風景、いっぱいの絵を描く。いつか、アタシがちゃんと描けたら、その時は絵、見てね。

ママ
……。

マヒル
見てね、ママ？

ママ
いつか、その日が来たらね。

マヒル
約束だよ。

と、ベッドから飛び出して、指切りをせがむ。

ママ
うん、約束。

と、それに応えるママ。指切りを解くとベッドに戻り、色鉛筆に、夢中になるマヒル。

ママ
絵をいくら描いたってお腹は膨れてはくれない。それでもマヒル。あなたにはその風景がこの世の何処かに広がっているって、探し続けて欲しい。せめてそれくらいの希望を。せめてそれくらいの色を……。

と、イスに倒れるように座り、上体をテーブルに預け、目を閉じる。

マヒル
「黄緑」「赤色」「紫色」これは……「橙色」。お日様の色！明るい、温かいお日様の色！ママ！

反応しないママ。

マヒル
ママ？……ねえ、ママ！

反応しないママ。

暗転。

闇の中に響くチヨの声。

チヨ
目にした事はない。だから、絵に描く。目にした事はない。だから、
描けない。疲れて眠り、うなされる。悪夢ばかり見てきた……違う。
それは夢なんかでは……。

あたりが明るくなる。

○「チヨ」の暮らす部屋（出逢いから一週間）

マヒルがベッドに座って、思い出の歌をハミングしながら、スケッチブ
ックに短い色鉛筆で絵を描いている。そこへチヨが帰って来る。手には
紙袋。

チヨ
ただいま。

描き続け反応しないマヒル。紙袋をテーブルに置くチヨ。

チヨ
マヒル。

マヒル
（チヨに気付き）あ。

チヨ
ただいま。

マヒル
（小さな声で）おかえりなさい。

チヨ
買ってきたよ。

マヒル
へ？

紙袋からリンゴジュースのパックを出す。

チヨ
リンゴジュース。マヒルのリンゴジュースは、澄んでるのですよ。
この前、濁ったリンゴジュースを出したら不思議な顔してたからさ。

マヒル
（頷く）

チヨ
やっぱりね。飲む？

マヒル
（頷く）

ジュースを持ち、奥へ向消えるチヨ。

マヒル あ、でも……。

チヨ 何？

マヒル ……チヨさんが好きなのはー。

チヨ (遮って) 大丈夫。心配しなくていいよ。

ジュースの入ったコップを二つ持って戻って来るチヨ。

スケッチブックを片付け、ベッドから出るマヒル。

チヨ はい。

と、コップを渡す。

マヒル (小さく一礼して受け取り、ゴクゴクと飲む)

チヨ おいしい？

マヒル (頷く)

チヨ 今日も一日、絵を描いてたの？

マヒル (頷く)

チヨ マヒルはホント、絵を描くのが好きなんだね。スケッチブックと色鉛筆だけ持ってたもんね。ねえ、見せてよ。

マヒル (首を振る)

チヨ ダメなの？

マヒル (頷く)

チヨ そっか。

ジュースを飲む二人。

チヨ マヒル。描いてるのに、誰にも見てもらわないの？

マヒル ……。

チヨ きつとき、見てもらった方が絵も喜ぶと思うよ。

マヒル 「喜ぶ」？

チヨ そっ。絵も独りぼっちじゃね。

マヒル ……。

チヨ
時々はさ、外に行って描いてみたらどう？毎日、部屋の中で過ごして、詰らなくない？部屋の外にはマヒルが描きたくなる風景がいっぱいあると思うよ。

と、ジュースを飲み干す。

チヨ
そうだ！次の休みに一緒に出かけようか。スケッチブックと色鉛筆持ってさ。ね、どう？

マヒル
……。

チヨ
行こうよ。

マヒル
チヨさんも描くの？

チヨ
私か……絵は自信がないな。

マヒル
描こうよ。

チヨ
下手くそだもん。

マヒル
描こうよ。色鉛筆、貸してあげる。

と、指切りをせがむ。

チヨ
ん？

マヒル
約束。

チヨ
うん、約束。

と、指切りをし、それを解き、

チヨ
おかわりは？

マヒル
うん。

マヒルのコップを受け取り、奥に消えるチヨ。

ベッドに戻り、色鉛筆を手にするマヒル。

揺れる灯り、響くノイズ音。

ミノルの声がする。

声（ミノル）
マヒル。マヒル。マヒル。

○マヒルの夢または回想（ある“施設”の部屋）

マヒルがベッドに座って、思い出の歌をハミングしながら、スケッチブックに短い色鉛筆で絵を描いている。

絵を描き続けるマヒル。ミノルが姿を見せる。

ミノル （無邪気に、ヘラヘラと） あっ！また絵、描いてるっ！。

マヒル （ハミングしながら描き続ける）

ミノル ねえ。楽しい？それって楽しいの？

マヒル （ハミングしながら描き続ける）

ミノル ねえってばさあ。

マヒル （ハミングしながら描き続ける）

ミノル ねえ。一緒に遊ばない？遊ぼうよ。

マヒル （ハミングしながら描き続ける）

ミノル ねえってばさあ。

マヒル （ハミングしながら描き続ける）

ミノル （相手にされないことに拗ねて） アヒル！

マヒル （ハミングとその手が止まる）

ミノル （泣き真似） グア、グア。グア、グア。

マヒル （語気を強く） マヒル！アタシ、マヒル！アヒルじゃない！アヒルの子じゃない！！マヒル！！

その勢いに押されたじろぐミノル。

ミノル （無邪気に、ヘラヘラと） あっ！また絵、描いてるっ！。

マヒル （ハミングしながら描き続ける）

ミノル ねえ。楽しい？それって楽しいの？

マヒル （ハミングしながら描き続ける）

ミノル ねえってばさあ。

マヒル （ハミングしながら描き続ける）

ミノル ねえ。何を描いているの？

マヒル (ハミングしながら描き続ける)

ミノル ねえ。教えてよお。見せてよお。

マヒル (ハミングしながら描き続ける)

ミノル ねえってばさあ。

マヒル (ハミングしながら描き続ける)

ミノル (相手にされないことに拗ねて) マヒル！

と、マヒルに近付き、スケッチブックに手を掛ける。

マヒル ダメ！

と、スケッチブックを引っ込めようとするが、ミノルは離さない。

ミノル いいだろ？

マヒル ダメ！ダメ！

と、スケッチブックを引っ張り合う二人。

ミノル 見せろよ！

マヒル ダメ！

と、スケッチブックを引っ張り合う二人。

ミノル 見せろ、見せろ、見せろ、見せろ、見せろ！

マヒル ダメ！ダメ！ダメエエエエ！！

ミノル 見せろオオオオオ！！

と、スケッチブックを奪い取る。

マヒル 嫌アアアアア！！

と、ミノルの腕に噛みつく。

ミノル 痛てっ！！痛い。痛い。痛い。

と、スケッチブックを落とし痛みになぞくまる。すぐさまスケッチブックを抱き抱えるマヒル。

マヒル (小声で) 見せるの。

ミノル 何するんだよお。

マヒル 見せるの。

ミノル はあ？

マヒル ママに見せるの。一番最初は、ママに見せるの。

ミノル 「ママ」？そんなの無理だよ。だってマヒルの母ちゃんはさー

マヒル (遮り) 約束した！

ミノル 約束？そんなの守られないよ。「また今度ね」「また今度ね」「また今度ね」守れられない約束ばかりが増えて行くんだ。「また今度ね」「また今度ね」「また今度ね」……そして突然「また今度ね」さえも聞けなくなるんだ。僕は知っている。約束は守れない。

マヒル (必死に) そんなことない！！

ミノル (必死に) 守れないんだ！！(間。またスケッチブックを奪おうとする) 見せろよ！

マヒル (逃げて) 嫌！

ミノル (追って) いいだろ！

マヒル (逃げて) 嫌！

ミノル (追って) いいだろ！

ベッドの上でマヒルの上に覆いかぶさるミノル。

マヒル 嫌！

ミノル いいだろ？減るもんじゃないんだから。

その時、ミヨが入ってくる。動きが止まるマヒルとミノル。

ミヨ ああ、ツマンナイ。なんか面白いことないかなあ？(舌打ちして) 一番ツマンナイこと言っちゃた。(二人に気づいて) 面白い！

ミノル ……ミヨ。

と、ベッドを下りる。ベッドに座るマヒル。

ミヨ ミノル。あんたも「男」なんだね。

ミノル 僕、男だよ。

ミヨ アンタのそういうの。それって技？

ミノル 「ワザ」？

ミヨ (舌打ちして、じっとミノルを見た後) 偽物やり続け、好き好んでこんなトコ来る意味もないか。羨ましいよ。

マヒル (ミヨのセリフにかぶるようにハミングし、描き始める)

マヒルを見るミノルとミヨ。

ミノル また始まった。絵を描いてるのに、見せないんだ。誰にも。そんなの描いても意味ないのにさ。

ミヨ 絵は見せる為に描くんじゃないよ。

ミノル 何のために描くんだよお。

ミヨ 奴に見つかる前に出て行きなさいよ。

ミノル 「奴」って？

ミヨ (抑揚なく) クチキよ。

ミノル 「クチキ」？

ミヨ (舌打ちして、入口の方を見る)

ミノル 「センセ」のこと？

ミヨ (苛立って) その呼び方、やめてよ。奴は私を何者かへと導く存在じゃない。奴も所詮、ココの住人よ。

ミノル ミヨだってそう呼ぶじゃないか。

ミヨ (抑揚なく) 出て行きなさいよ！

ミノル (動揺して) な、何だよお。

と、出てゆく。

ミヨ マヒル。ミノルに噛みついたでしょ？それはダメ。叩いたり、殴ったりしたアザならさ、誤魔化せるけど、噛みつきはさ。菌形残るし、どうにもならないからさ。ココで生きていくしかないんだから、そういうこと覚えないとさ。聞いているの、マヒル？

マヒル (ハミングしながら描き続ける)

ミヨ (語気を強め) マヒル！

とスケッチブックに手をかける。

マヒル (ハミングと手が止まり、ミヨを見る)

その時、センセの音がする。

センセ (声) ミヨ！どこだあ。

ミヨ (にっこり笑って) チョコレート。好き？

マヒル へ？

ミヨ 好き？

マヒル (頷く)

ミヨ (にっこり笑う)

センセが入ってくる。

センセ ミヨ、ココにいたのか。探しだぞ。

ミヨ (作った声で) センセ。

センセ ミヨ。

と、ポケットからチョコレートを出しミヨに差し出す。

ミヨ (一瞬の間の後、チョコレートを受け取り、作った声で) センセ。
マヒルもチョコレートが好きなんだって。

と、出て行く。

センセ (マヒルを見て) そうか、マヒル。チョコレート好きなんだね。

マヒル (頷く)

センセ それじゃ、持ってきてあげるよ。チョコレート。

マヒル ホント？

センセ もちろん。

マヒル 約束。

と、小指立て、その手を差し出すマヒル。

センセ そう約束。

指切りに応えるセンセ。それを解くと部屋を出て行く。

照明が変わる。

○「チヨ」の暮らす部屋（再び、出逢いから一週間）

ベッドの座っているマヒル。そこにチヨがコップを二つ持ってやって来る。

チヨ　マヒル、お待たせ。

と、コップの一つをテーブルに置き、もう一つを口に運ぶ。ベッドを離れ、コップを持ちにくるマヒル。口に運ぶ。

チヨ　ねえ、どこ行こうか？

マヒル　へ？

チヨ　次の休みよ。

マヒル　「どこ」……？

チヨ　そう聞かれても、この辺のこと分かんないか。

と、一口。

マヒル　うん。

と、一口。

チヨ　それじゃ……人がいっぱいのとこと静かな……静かなとこだね。

マヒル　うん。

チヨ　海と山なら？

マヒル　んー。

チヨ　海なら……そうね……砂浜、船、水平線……。

マヒル　イルカさん、いる？

チヨ　イルカかあ、それはちよつといないかな。

マヒル　そう。

チヨ　山なら……そうね……大きな木、小川、小鳥……。

マヒル 小鳥さん、いるの!?

チヨ ……多分。

マヒル ……。

チヨ よし、山に行こう!

マヒル うん。

と、コップをマヒルのそれに合わせて、一口。マヒルも一口。

チヨ バスと電車、どっちで行こうか?

マヒル ……。

チヨ そう聞かれても、分かんないか。

マヒル (小声で) 電車。

チヨ ん?

マヒル 電車、乗りたい。

チヨ よし、そうしよう。次の休みは電車に乗って、山に行こうね。

と、コップをマヒルのそれに合わせる。

マヒル チヨ。

チヨ ん?

マヒル (じつとチヨを見つめる)

チヨ どうした?

マヒル (じつとチヨを見つめる)

チヨ (笑って) どうしたの?

マヒル チヨ、ありがとう。

チヨ (戸惑う)

マヒル ありがとう。

チヨ (微笑んで) どういたしまして。

と、コップを傾げる二人。空になったコップをテーブルに置く。

マヒル ねえ、チヨ。

チヨ ん？

マヒル あのね……。

と、その先が続かない。

チヨ どうしたの、マヒル？

マヒル あのね……。

しばしの静寂。

チヨ マヒル。アンタさ……。

マヒル (チヨをじっと見る)

見つめ合う二人。

チヨ (取って付けたように) あ、忘れてた。

マヒル へ？

チヨ もう一つ買って来た物があるんだ。

マヒル へ？

チヨ マヒル。チョコレート、好き？

と、コップを二つ持って奥に消える。

応えることなく、ベッドに座るマヒル。

揺れる灯り、響くノイズ音。

センセの声がする。

声 (センセ) マヒル。マヒル。マヒル。

○マヒルの夢または回想 (ある“施設”の部屋)

暗い部屋に懐中電灯の灯りが差し込んでくる。それに毛布を下半身に掛けベッドに座っているマヒルが映る。

センセが入って来る。

センセ 眠れないのかい？

マヒル ……センセ？

自分の方を少し照らした後、床に明かりを向ける。

センセ 今日、ミノルが遊びに誘いに来たんだって？

マヒル ……。

センセ ココで一緒に暮らしてるんだ。お友達になりたいと思ってるんだよ。

マヒル ……アタシ、独り。

センセ 違う。

と、明かりをマヒルに向ける。

マヒル みんな、独り。

センセ 違うよ。マヒルもミノルもミヨも、独りぼっちなんかじゃない。ココにしか居場所がなくても、ココがある。みんな仲間なんだよ。

マヒル (大きく首を振る)

センセ (大きく息を一つして) マヒル。約束通りチョコレート、持ってきたよ。

と、マヒルに近づいてゆく。

部屋の灯りが付く。

センセ (懐中電灯をポケットにしまい) 秘密だよ。誰にも言っちゃダメ。

と、チョコレートを差し出し、口に人差指を立てる。それを真似して、チョコレートを取り、素早く開けて、小さくかじるマヒル。

センセ おいしい？

マヒル (頷き、勢いよくチョコレートを頬張り始める)

センセ (マヒルを見つめながらベッドの周りをまわり) そんなに慌てなくても、誰も取りはしないよ。

マヒル (勢いよくチョコレートを頬張り続ける)

センセ 口の周りにチョコレートついてるよ。みんなに秘密にならないよ。

と、笑い声を上げ、拭きとる。

マヒル (一瞬、驚きの表情を見せるが、すぐに食べ続ける)

センセ

ほら、また。

と、今度はベッドに座ってチョコレートを拭き取ると、それを舂める。

マヒル

(驚きの表情を見せ、食べるのを止める)

センセ

眠れないんだね。

と、毛布を自分の下半身に掛け、マヒルの正面に座りなおし、マヒルの髪を撫でる。その手は次に頬を、そして唇をなぞる様に触、軽く摘む。

マヒル

センセ……。

センセ

寂しいんだね。

マヒル

センセ……セン――。

センセ

(マヒルの口到人差し指を立て) 秘密だよ。誰にも言っちゃダメ。心配しなくていい。夜は怖くないし、寂しくないよ。マヒルは独りぼっちなんかじゃない。

部屋の灯りが落ちる。(暗転)

毛布の中で懐中電灯が付く。マヒルの目を見開いた表情が浮かび上がる。唇に触れていたセンセの手が毛布の中へ。ゆっくりと動き、その影がマヒルの顔に映る。

と、毛布をまくりあげ、マヒルの下半身に顔を突っ込む。懐中電灯の灯りに、より一層目を見開いたマヒルの表情が浮かび上がる。

マヒル

カッ、カッ、カッ、カッ……。

と、息とも声とも取れない音を発する。

やがて懐中電灯が消え、暗くなった部屋に色鉛筆を持ったミノルが入ってくる。

ミノル

マヒル。今日はゴメンね。でもさ、僕さ、マヒルと……と、トモ……トモダチにさ……あつ、マヒルの色鉛筆、どれも短いだろ？僕、絵なんて描かないからコレあげるよ。

と、色鉛筆をテーブルに置く。

もぞもぞと動く毛布。

ミノル

マヒル？

マヒル

……センセ。

ミノル
マヒル？！

毛布の中から懐中電灯が出てきて、ミノルを照らす。

驚き、目を覆うミノル。

センセ
(毛布の中から)ミノル、もう寝る時間だろ。

ミノル
えっ！？

ミノルを照らしながら毛布から出てくるセンセ。眩しそうにセンセを見るミノル。

センセ
部屋に戻れ。

ミノル
…：セ…：セ…：セ…：セ。

センセ
まだ寂しいんだろうな。一人じゃ眠れないんだな。しばらくは俺が面倒を見ないとな。

と、照らしながらミノルに歩み寄る。

ミノル
センセ。

センセ
(ミノルの口を押さえ)さ、ミノルも自分のベッドに入れ。

と、手をゆっくり離し、出口に向かう。しかし、ベッドの方を見て動かないミノル。

ミノル
(もごもごと口を動かす)

センセ
ミノル。

と、灯りを向ける。

ミノル
(絞り出し) …：セ…：セ…：センセ…：…。

センセ
(強く)ミノル。

ミノル
同じだ。同じだよ。あの日…：母さんの時と同じだよ！

センセ
(抑揚なく)ミノル、行くぞ。

ミノル
あの男も言ったんだ。「寂しいんだろうな」って、ゾクゾクしてる笑顔で言ったんだ。

センセ
(抑揚なく)ミノル、行くぞ。

ミノル
何したの？マヒルに何したの？

センセ
行くぞ。

ミノル
センセ。マヒルに何した！！

センセ
と、センセの肩を掴む。

センセ
部屋に戻って寝るんだ。

ミノル
と、ミノルの手を掴み、肩から離す。

センセ
マヒルに何した！！

ミノル
と、逆の手でセンセの腕を掴み、部屋の中央に引っ張る。

センセ
さあ、戻るぞ。

マヒル
と、ミノルを出口に引っ張る。引き合う二人。揺れる懐中電灯の灯り。
やがて、センセがミノルの腹を足で押し、ベッドに倒れるミノル。

マヒル
きやつ！

ミノル
と、声を上げ毛布をはおり上体を起こす。

センセ
部屋の灯りがつく。

マヒル
何したんだよお！

ミノル
(懐中電灯をしまい) 知りたいか？なら教えてやろうか？なんならもう一度。お前の眼の前でしてやろうか？なあ、マヒル。

マヒル
(激しく首を振る)

ミノル
あの日、僕は何もできなかった。ただ怯えて、震えて、部屋の隅っ
こで小さくなっていただけだった。でも今は違う！僕は違う！今度こそ守るんだ！大切な人を守るんだ！！

センセ
センセに殴りかかるミノル。それを受け止め、はじき返すセンセ。

センセ
(噴き出すように笑い出す。やがて大きな笑い声となり) ミノル。
何が「大切な人を守る」だ。タダ飯喰らって、図体だけ大人になっ
たお前に何ができるって言うんだよ。面白いこと言うなよ、笑える
よ(と、手を叩き笑う)

ミノル
……うるさい。

センセ
お前、わかってるだろ？それともアレか。頭弱いから、本当に忘れ
ちまったのか？

と、床に寝ているミノルを蹴り飛ばす。床を張って逃げるミノル。

ミノル うるさい！

センセ なあ、見たんだろ？母親は自分から股開いたんだよ。

ミノル うるさい！！

センセ （笑いが消え、抑揚なく）なあ、知ってるんだろ？母親はお前がうるざりだったんだよ。お前が邪魔だったんだよ。男と暮らす為に捨てたんだよ。それなのに、なあ覚えてるんだろ？そいつがくれた玩具に喜んで、夢中になって、笑ってよ。

と、ミノルを掴み何度も床に、ベッドに打ち付ける。

ミノル うるさい！！母さんは僕を捨てた……違う！僕が母さんを守れなかつた。僕が小さく、弱かった。母さん……母さん……母さん！！ゴ

メンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ！！

と、誰にと言うわけでもなく、床に額をぶつけながら謝り続ける。

センセ お前が守れなかったのは母親じゃない。お前自身だ。自分を守れない奴に、誰かを守るわけないんだよ。笑わせるな。親に見捨てられたノータリンのミナシゴがよ！

と、ミノルの頭を掴み、机に打ち付けるセンセ。

マヒル センセ、止めて！

センセ 止まらねえ。収まらねえ。楽しい記憶なんて残ってねえのに、何が「母さん」だ。いつまで「ママ」だ。お前から見てるとなあ、どうしようもなく壊したくなるんだよ！気持ち悪るいんだよ！

と、ミノルを蹴り飛ばす。力なく床に倒れるミノル。

その時、ミヨの声が響く。

ミヨ 眠れない！眠れないよお！

毛布を羽織り、ミヨが現れる。

ミヨ 眠れない。眠れないよ。センセ、眠れないよ。

と、センセに近づいてゆく。ミノルから離れるセンセ。咳き込むミノル。

ミヨ センセのせいだよ。センセがこうしちゃったんだよ。私、センセがさ、センセのことがさ。ね、わかるでしょ？わかるよね？（センセの頬に手を当て）眠れない。眠れないよ。私、眠りたいの。

と、センセに寄りかかると、その瞬間にセンセの表情が歪む。

ミヨがゆっくりとセンセから離れると、毛布が落ち、その腕には無数の切り傷。その手には血に染まった小刀。自分の腹を押さえるセンセ。そして、ばたりと倒れる。激しく息をしながらセンセを見下ろすミヨ。

ミノル (小刀と血を見て) わあ、わあああああ！ (と、小さくなり震える)

マヒル (じつとセンセを見ている)

センセ ミヨ。これで眠れるのか？本当に眠れるのか？寝苦しい夜がこんな

事で終わるのか？(ふらふらと立ち上がりながら) ミヨ！マヒル！ミノル！見てるか？見えるか？鏡なんだよ。鏡。今、俺は過去。お前たちは未来。「いつかその日」の自分を見てるんだよ。落ちた奴は落ちたまま。弾かれた奴は弾かれたまま。希望なんて初めから何処にもねえ。居場所なんて何処にもねえ。寝苦しいココ以外にねえ。俺たちが見えてるのは俺たちだけだ。仲間なんだよ。もっと仲良くなってお友達に……さ。

と、笑い出し、倒れ、そして、泣く。

マヒル (小声で) ダメ……死んじやダメ……。(叫ぶ) 死んじやダメ！(首

を激しく振り) 誰も死んじやダメエエエエ！！

センセの泣き声が途絶える。

ミノル セ、センセ？ねえ、センセ？(センセの体を揺するが反応なく)

わっ、うわああああああああああああああああああ！！

と、悲鳴を上げて部屋を出る。そして、部屋の外から大きく鈍い衝突音。

しばしの静寂。

ナイフを握った右手、左手を使って開こうとするミヨ。なかなか上手くはいかない。

ミヨ アンタがココに来て思った。怯え、震え、寝苦しい夜が終わる時が

来たんだってさ。男は新しい物好きだしさ。アンタを使えばコイツから逃れられるってさ。私にもわずかだけど運ってやつが巡って来たってさ。

マヒル (驚いた顔でミヨを見る)

ミヨ (小声で) 畜生、指が言うこときかないよ。何でよ、何でよ！畜生。

畜生。チクショー！(首を何度も激しく振り、語気を荒げ) 何でよ、

何だよ！何で笑えないのよ。何で喜べないのよ。ねえ、嘘って言うて。ねえ、違うって言うて。コイツに求められた時、私は独りぼっちじゃなかった。でもそれは、認めたわけで、受け入れたわけでもないの。だけど……何だよ、何だよ！何で笑顔になるの！？何で胸が高鳴るの！？（涙で声が詰まり、振り絞って）独りぼっちじゃない……ただそれだけのことで。

と、小刀をゆっくりと胸の高さまで上げてくる。ベッドから身を乗り出し、手を伸ばすマヒル。

マヒル

ミヨ。

ミヨ

マヒル。ココは冷たくない。けど、温かくもない。居場所じゃない。けど、他はない。（センスを見下ろし）コイツの……センスの言うとおりの。

マヒル

ミヨ！

暗転。

闇の中に響くチヨの声。

チヨ

独りじゃ生きられない。理屈じゃない。心に、軀に刻まれている。だから、簡単には捨てられず、何かにしがみつく。生きる為に自分を殺す。もう終わりにしたい。笑いた時に笑って、泣きたいとき泣いて、好きなものを好きって大声で……。

あたりが明るくなる。

○「チヨ」の暮らす部屋（出逢いから一ヶ月）

ベッドで寝ているマヒル。毛布がはだけている。スケッチブック、色鉛筆が床に落ちている。

そこにチヨが帰って来る。手には紙袋。それをテーブルに置きマヒルに毛布をかけ、床に散乱した物を片付け始める。最後にスケッチブックを拾う。ベッドのマヒルに目をやり、スケッチブックを開こうとするが……止めて、それをベッドの隅に置く。

寝返りを打ち、次の瞬間、勢いよく目を覚まし、上体を起こすマヒル。

チヨ ただいま。

マヒル おかえり。

チヨ 今日も外へ行ったの？

マヒル うん。

チヨ それで疲れて寝ちゃったのね。でもさ、ダメだよ。毛布掛けずに寝ちゃ、風邪ひくよ。マヒルお腹出して寝るから、すぐひいちゃうよ。

マヒル (お腹を慌てて押さえて) うそ!?

チヨ (クスッと笑う)

と、マヒルの服を奥に持ってゆく。

マヒル (膨れて) いじわる。

声 (チヨ) マヒル、飲む!?

マヒル うん。

コップを二つ持ってチヨが戻って来る。

チヨ はい、マヒル。

と、テーブルにマヒルのカップを置く。ベッドから出て来てコップを取るマヒル。

チヨ お疲れさま。

と、コップをマヒルのそれに合わせ、口に運ぶ。マヒルも。

マヒル 山の公園。また一緒に行こうね。

チヨ そうね。

マヒル また色鉛筆貸してあげる。

チヨ (笑って) 私はやっぱり、絵はいいよ。

マヒル えー。

チヨ (笑って) でもさ、また行こうね。で、その時はこれを使ってね
と紙袋を差し出す。

マヒル 何？

チヨ プレゼント。

マヒル 「プレゼント」？

チヨ そう。

マヒル 今日は誕生日じゃないよ。

チヨ そう……なのね。

マヒル クリスマスじゃないよ。

チヨ そうね。

マヒル どうして？

チヨ 記念、かな。

マヒル 「記念」？

チヨ マヒルと私が出逢った記念。

ベッドから出て、紙袋を手にするマヒル。紙袋の中身を取り出す。それは24色の色鉛筆。

マヒル これ……

チヨ 色鉛筆。気に入ってくれたかな？

マヒル どうして？

チヨ マヒルの色鉛筆、もう短いでしょ？ない色もあるしさ。

マヒル うん。でも……。

チヨ いっぱいの風景には、いっぱいの色がある。その色鉛筆でマヒルの風景を、彩られた風景を描いて欲しいの。

色鉛筆をじっと見つめるマヒル。

マヒル チヨ、何したらいい？私、何したらいい？何したらいい？チヨ、言っ……

チヨ マヒル？

マヒル ……チヨ。

チヨ ん？

マヒル 絵、見たい？

チヨ
（首を振って）マヒルがコレで好きなものを。描くべきものを描いてくれれば、それでいい。私はさ、マヒルの絵を見たいの。だから、もつといっぱい絵を描いて、マヒルが「これ」って思える絵を描けたその時、見せて欲しいの。

と、右手の小指とマヒルのそれとを絡めるチヨ。

チヨ
約束だよ。いつかその日が来たら、マヒルの絵を見せてね。

指切りを解くと、

チヨ
そうだ、マヒル！明日、映画観に行こうよ。

マヒル
「映画」？

チヨ
もう随分、観てないな。だからさ。行こうよ、映画。

マヒル
……。

チヨ
あつ。今、何やってるんだらうね。

マヒル
へ？

チヨ
（笑って）全然、わかんないや。

マヒル
（つられるように笑う）

チヨ
でも、行こうよ。ね？

マヒル
映画……一度だけ、ママに連れて行ってもらった。

チヨ
そっか。（一口飲んで）なら、二度目は私と一緒に行こう。

マヒル
いいの？

チヨ
もちろん。よし、決まり！

と、コップをマヒルのそれに合わせ飲み干す。

マヒル
う、うん。

と、飲み干す。

チヨ
シャワー浴びてくるね。

と、マヒルのコップも持って奥へと消える。

新しい色鉛筆を開き、一本を手にする。しかし、絵を描き始めない。

マヒル
ママ、色鉛筆くれた。いなくなった。色鉛筆あっても、色がなくな

る。真っ黒風景。闇。何も見えない。何も描けない。

シャワーの音が響いてくる。

揺れる灯り、響くノイズ音。

マヒルを呼ぶ声がある。ママの声だ。

声（ママ）
マヒル。マヒル。マヒル。

○マヒルの夢または回想

椅子に座って色鉛筆を眺めているマヒル。

ママが現れる。

ママ
マヒル、ご飯はちゃんと食べたかい？

マヒル
ママ！

と、立ち上がり抱きつく。

ママ
（頭を撫でながら）絵は描き終えたの？

マヒル
（ママから離れ、首を振る）

ママ
描く風景を見つけれられないの？

マヒル
（頷く）

ママ
諦めるの？

マヒル
（首を振る）

ママ
それじゃあ、泣いたらダメだよ。

マヒル
（首を振り）泣いてないもん。

ママ
そう？

マヒル
うん。（と言いつつ、手を目に当てる）だって……。

ママ
なんだい？

マヒル
ママ、いない。

ママ
そうね。

マヒル 約束したのに！

ママ ゴメンね。

マヒル (首を振る)

ママ 恨んでるよね？

マヒル (首を振る)

ママ 憎んでるよね？

マヒル (首を振る)

ママ 嘘。

マヒル 嘘じゃないもん。

ママ マヒルが描く風景を見つけれないのは、ママのせい。馬鹿な男の耳触りのいい甘い言葉を簡単に信じた馬鹿な女。そんなママの子だから。

マヒル (首を振る) 約束を守れなかったのは、アタシが小さくて、弱くて、何も出来なかったから。今も同じ。アタシ、小さいまま。弱いまま。

ママ マヒル、座って。

と、マヒルにイスに座る様に即す。懐から櫛を取り出し、マヒルの髪をとかし始める。

ママ マヒルは大きくなったよ。

マヒル (首を振る)

ママ そんなことないよ。

マヒル アタシ、わからないままだよ。

ママ 何が？

マヒル アタシを知りたい。でも、わからない。ママ教えて！アタシは何処？アタシは何？どうして夜は来て、どうして夜は明けるの？どうして、アタシを置いて行くの？独りぼっちにしないで！

しばしの静寂。

ママ チョって言ったね。あの子。独りぼっちじゃないでしょ？

マヒル チョは…ママじゃない。

ママ でも、独りぼっちじゃないでしょ？

マヒル ……。

ママ 優しいかい？

マヒル チヨは……。

ママ 優しくないのかい？

マヒル (首を振る) 求めないし、奪わない。出逢ってからずっと優しい。

ママ チヨの事、大好き。

ママ 良かったね。

マヒル ……。

ママ 良くないの？嬉しくないの？

マヒル ベッドも毛布もパンもリンゴジュースも嬉しい。でも、でも、でも

…… 苦しい。

ママ 「苦しい」？

マヒル (頷く) ねえ、ママ。あの時の映画。ママの観たかった映画だった？

あの色鉛筆。買わなかったらママの欲しい物買えた？ママのお薬買えた？

ママ (黙って髪をとく)

マヒル ママ！

ママ (髪をとく手を止め) さ、終わったよ。

と、マヒルをイスから立たせ、向かい合い髪をひと撫でして、次の瞬間に抱きしめる。

マヒル ママ？

ママ マヒル、本当に大きくなったね。

マヒル ママ？

ママ (腕を離し) マヒル、もう時間だよ。

と、マヒルをベッド連れて行く。マヒルに毛布をかけ、子守唄を歌うように思い出の歌をハミングする。寝入ったマヒルを見て、

ママ 目を閉じて、小さな寝息を立てて……あの時の同じね。アンタを初

めてこの手に抱いた時。その重さ、その温もりはずっと消えることなく、この手に残っている。マヒル。あなたは私の子。だけどね、私じゃない。きっと大丈夫。だからもう次の夢……ね、マヒル。

と、消える。

照明が変わる。

○「チヨ」の暮らす部屋（二カ月）

ベッドで眠っているマヒル。

マヒル ママ、ママ……。

と、寝言を何度か繰り返す。

勢いよく目を覚まし、上体を起こすマヒル。スケッチブックと色鉛筆を手にする。しかし、描き始めない。描けない。

やがて、スケッチブックを破り、床に撒き散らす。

そこへチヨが帰ってくる。

チヨ （床の紙片を見て、驚きながらも）ただいま。

マヒル ……。

チヨ 今日は出かけなかったの？

マヒル ……。

チヨ （紙片を拾いながら）新しいスケッチブックも買わないとね。明日、休みだから行こうか？

マヒル ……いい。

チヨ どうして？

マヒル いいの。

チヨ （さらに問おうとするが、止めて）そう。

と、奥に行こうとするが、足を止め、

チヨ マヒル、飲む？

答えずに黙って奥に消えるマヒル。

チヨ
マヒル？

マヒルが戻って来る。手にはジュースの入ったコップ。

チヨ
言えば持って来たのに。

マヒル
いいの。

と、一気に半分ほど飲む。

チヨも奥に消え、ジュースを持ってくる。

チヨ
ねえ、マヒル。明日、また映画観に行こうか？

マヒル
（顔を向けるだけで、応えない）

チヨ
ね？

マヒル
（視線を外して、首を振る）

チヨ
なんで？行こうよ。

マヒル
観るの、ない。

チヨ
やっている映画、知っているの？

マヒル
知ってるよ！

コップをテーブルに置き、ベッドに向かうマヒル。

チヨ
マヒル？

枕元から雑誌を一冊取り出し、チヨにそれを渡すマヒル。

マヒル
「また一緒に行きたいなあ」って、映画のページ、見てる。

チヨ
なら、行こうよ。

と、雑誌をめくる。

マヒル
見つからない。

チヨ
「見つからない」？

マヒル
「チヨと観に行く映画」いつも、いつも見つからない。「チヨと観た

い映画」探すけど、見つからない。

チヨ
マヒルがー。

マヒル (遮って、強い口調で) 見つからない!

雑誌テーブルに置くチヨ。

チヨ 「マヒルが観たい映画」は探さないの?

マヒル 「チヨと観に行く映画」探すの!

チヨ 「マヒルが観たい映画」なら、私も観たい。一緒に、行こうよ。

マヒル ダメ。

チヨ いいよ。

マヒル ダメ。

チヨ なんで?

マヒル ダメ!!

チヨ なんでよ。

マヒル ダメなの!

チヨ なんで?

マヒル 嘘だもん。

チヨ 「嘘」?

マヒル みんなみんな嘘だもん!

と、勢いよく残りのジュースを飲み干し、コップを奥に片づけに行く。

チヨ、再び床の紙片を拾う。マヒル、戻って来てその姿を見つめるマヒル。

しばしの沈黙。

マヒル ……どうして?

チヨ ん?

マヒル どうして、あの日、ベッド使わせてくれたの?

チヨ (手を止め) ドアの前で倒れてたんだよ。放っておけないじゃない。
ない。

マヒル どうして、ずっと、ベッド使わせてくれるの?

チヨ
（立ち上がりマヒルを見て）行くところない。それなら、ここにいれ
ばいい。

マヒル
どうして、一緒に居てくれるの？

チヨ
（拾った紙片が手からパラパラと落ちる）

揺れる灯り、響くノイズ音。

いくつもの声の思い出の歌をハミングするいくつもの声がある。

そして、ミヨを呼ぶ声。

声
チヨ、チヨ、チヨ。

チヨ
（モノローグ）「どうして」当然の疑問。それを自分自身に向けてい
なかった。不自然ほど自然に、私とマヒルは一緒に暮らしている。
あの日、色を失ったマヒルの姿に私は見た。誰も寄り添えない孤独。
忘れた振りをした決して消せない記憶。

声 1
こんな物でも食べればお腹が膨れる。そんな絵、いくら描いたって
腹は膨れないんだよ。

声 2
約束！そんなの守られないんだよ。「また今度ね」「また今度ね」「ま
た今度ね」守られない約束ばかりが増えて行くんだ。

声 3
そんなに慌てて……口の周りにチヨコレートついてるよ。みんなに
秘密にならないよ。秘密だよ。誰にも言っちゃダメ。

声 4
ココは冷たくない。けど、温かくもない。居場所じゃない。けど、
他はない。

声
チヨ！

チヨ
（耳をふさぎ震えだす）

何度も叫ぶが届かない（サイレント）。

マヒル
（抱きつき）チヨ！

元に戻る照明。

マヒル
アタシ、「次は」って思ってる。このままじゃダメ。だから、次、色
鉛筆を持ったら、アタシ描き上げる。アタシ、信じる。「次は」って、
そう信じる。だから、チヨも信じて。

チヨ
私？

マヒル

(その手を解き、頷き) チヨ、無理してる。私に優しくしなきゃって、無理してる。帰りが遅くても、疲れていても、「マヒルが好きなのがいいよ」「マヒルが食べたいものでもいいよ」「マヒルが観たいものでもいいよ」「マヒルが」「マヒルが」「マヒルが」「マヒルが」……チヨはいつも優しい。求めないし、奪わない。いつも無理してる。(強い口調で一気に) そんなことしなくても私はいなくならない! 私、チヨのこと大好き。「チヨが好きの方」「チヨが食べたいもの」「チヨが観たいもの」それもなくちゃダメ! このままじゃ、動けなくなっちゃう。壊れちゃう。笑いたい時に笑って、泣きたい時に泣いて、大好きなものを大好きって大声で言えなくなっちゃう。そんなの嫌だもん。私、絶対に、絶対に、絶対に、絶対に、絶対に、絶対に、絶対に、絶対に、そんなの嫌だもん! もう何も、もう誰も失いたくない!! (乱れた息を整え) 私だってあげたい。私にだってしてあげられことある。大好きだよ。大好きなんだよ。チヨ、独りじゃないんだよ!

チヨ

(涙が頬を伝う。それを拭うことなく立ち尽くす)

マヒル

チヨ?

チヨ

マヒルもあの日、見たんだね。

マヒル

あの日? 何を?

チヨ

(首を振り、マヒルを強く抱きしめる)

チヨ

そうね、独りぼっちじゃない。

マヒル

独りぼっちじゃないよ!

強く抱きしめ合う二人。

マヒル

今度は描き上げる。

チヨ

(頷き) 見たい。描き終えたマヒルを見たい。見せてね。

マヒル

(頷き) 見たい。描き始めるチヨを見たい。見せてね。

と、腕を解き、指切りを求めるマヒル。指切りに応えるチヨ。

青白い朝の明かりで部屋が染まり始める。

マヒル

あ、夜が終わるね。

チヨ

朝が始まるね。

マヒル 今日だね。

チヨ ん？

マヒル (ニヤツと笑って)一緒にスケッチブックを買いに行くの。

チヨ 今日だね。

マヒル (大きな欠伸をする)

チヨ (クスツと笑って)少し寝ないとね。(大きな欠伸をする)

二人して、声を出して笑う。

マヒル 「いつかその日」は、終わりじゃないよね。

チヨ うん。

マヒル 終わりが来ないって、寂しくないんだよね。先があるって、悲しくないんだよね。

チヨ うん。次の風景。きつともっと、優しくて、柔らかくて、静かで…心地よく…。

指切りを解き、手を握る。

チヨ 自分を守れない奴に、誰かを守る事はできない。小さく弱い二つの手。繋いだところで強くはなれない。弱い。だけど、繋いだ小さく弱い二つの手。

手を解き、ベッドに向かい横になるマヒル。イスに座りそれを見つめるチヨ。

チヨ ひどく寝苦しい夜…それは特別な事じゃない。結局、あの日から変わってはいない。ただ、それを一緒に超えられる者がいる。ほんの少しだが、その事で夜が、そして夜が明けるのが怖くなくなった。今はしがみつく。小さく弱いこの想いにしがみつく。

朝の街の音、やさしい朝の光に包まれる二人の部屋。

暗転。

FIN

○キャスト

マヒル……………酒井麻衣

チヨ……………MAYU

ママ……………北澤さおり

ミノル……………藤田ヒロシ

ミヨ……………史奈子

センセ……………小粥幸弘

○スタッフ

演出……………藤田ヒロシ

音響……………白柳友紀

照明……………日浦カズトシ

制作……………れい子

○公演情報

日にち……………2016年7月2日・3日

時間……………2日・19時／3日・13時
17時

会場……………木下恵介記念館